



Asahikawa Medical University Repository <http://amcor.asahikawa-med.ac.jp/>

卒業研究抄録集(看護学科)(2017.12) 平成29年度:43-44.

保健事業展開における保健師と事務職の連携の工夫-管理期の市町村  
保健師へのインタビューから-

齊藤 愛, 滝本 裕理香

# 保健事業展開における保健師と事務職の連携の工夫

## —管理期の市町村保健師へのインタビューから—

斉藤 愛 滝本裕理香（指導：塩川 幸子）

### 緒 言

保健師は、地域住民の健康の保持・増進を図るために保健事業を展開している。しかし、近年、保健師の活動は疾病構造や少子高齢化の進行により多様化している。その中で、組織を横断的な立場から総合調整を行う統括保健師への期待は大きい<sup>1)</sup>。行政に所属する保健師は事務職との連携が欠かせない。大森らは、多くの保健師が日頃の保健事業の展開過程で事務系職員と意見が異なる倫理的ジレンマに遭遇していると報告している<sup>2)</sup>。しかし、事務員との間でジレンマを抱えた時や連携にあたり保健師が行っている工夫に関する研究は見当たらない。

本研究は、市町村に勤務する管理期保健師を対象に、事務職との連携における工夫を明らかにすることを目的とした。保健師が実際に経験した事例から連携の工夫が明らかになることで、事務職と連携する際の示唆を得る。

### 方 法

**研究対象：**市町村に勤務し事務職との連携について経験豊富な係長職以上の管理期保健師2名とした。

**調査方法：**半構成面接法による質的記述的研究とした。2017年8～9月、保健センター内の個室を借用し、学生2名が保健師1名に対し60分程度のインタビューを行った。内容は対象者の承諾を得て録音した。

#### 調査内容：

- 1) 対象者の属性：年齢、性別、保健師経験年数、現在の職位、所属市町村の人口
- 2) インタビュー内容：①事務職と連携してよかったこと ②事務職との連携で大変だったこと・その場面 ③事務職との連携で心がけていることや工夫 ④その他事務職との連携で感じていること

**分析方法：**録音データから逐語録を作成し、事務職との連携の工夫に関する内容を抽出しコード化した。コードを意味内容により類似分類しサブカテゴリーを作成、さらに抽象度を上げたカテゴリーを作成した。

**倫理的配慮：**旭川医科大学倫理委員会の承認を得て実施した(承認番号17025)。対象者に、研究目的と方法、

研究参加の自由意志、同意撤回も可能であること、不参加や同意撤回による不利益はないこと、匿名性の確保、研究終了後のデータ破棄等を文書と口頭で説明し、同意書に署名を得た。

### 結 果

対象は、市町村に勤務する管理期保健師2名で、いずれも年齢50歳代の女性であり、保健師経験年数は平均29.0年であった。職位は課長1名、係長1名であった。所属市町村の人口は1万人未満1名、3万人未満1名であった。

分析の結果、5カテゴリー、24サブカテゴリーを作成した(表1)。以下、カテゴリーを【】、サブカテゴリーを〈〉で示す。

表1. 保健師と事務職の連携における課題と工夫

カテゴリー(5)	サブカテゴリー(24)
事務職との連携における難しさ	事務職の熱意や考え方・得意な部分の個人差 事務職の職位によって対応が異なる 事務職の上司に保健師の仕事の理解を得る 事務職の異動で説明を一からやり直す 事務作業の増加で保健指導の時間が削られる
互いの役割を活かした連携	住民目線の貴重な意見をもらい一緒に考える 保健師だけでは稼働がとれない部分を連携 事務職との連携による抜け目のない支援 切り札となる法的根拠を示し主担当で動いてもらう 事務職が得意とする仕事を理解 連携の体験からその大切さをつかむ
事務職との連携を促進する打ち合わせ	人が変わっても繰り返し説明し方向性を共有 打ち合わせの参集範囲の判断 顔の見える綿密な打ち合わせ スケジュール管理を行い見通しを伝える 現場に出向き住民の生の声から現状共有
事務職の理解を得る伝え方	保健活動の結果はすぐ表れないが数値で求められることへの対応 保健師の関わりが全てではないが成果との関係を見せる 簡潔で目を引きわかりやすい伝え方
保健師の連携を重視する姿勢	組織を越えて事務職と連携するスタンス 仕事は一人ではできない 目標に向かい役割分担しPDCAサイクルを意識 リーダーとして目標や仕事の姿勢を示し共有 日常の対話を重視した職場の雰囲気づくり

保健事業展開において、保健師は【事務職との連携における難しさ】を感じていた。そのため、保健師は【事務職と保健師の互いの役割を活かした連携】や



【事務職との連携を促進する打ち合わせ】、【事務職の理解を得る伝え方】を工夫していた。さらに、日々の活動において、【保健師の連携を重視する姿勢】を基盤とし、事務職と連携して保健事業を展開していた。

## 考 察

### 1. 事務職との連携の課題と重要性

本研究を通して、保健師の体験から【事務職との連携における難しさ】として、〈事務職の熱意や考え方・得意な部分の個人差〉、〈事務職の職位によって対応が異なる〉、〈事務職の上司に保健師の仕事の理解を得る〉、〈事務職の異動で説明を一からやり直す〉などが挙げられた。これらから、事務職との役割分担や連携がうまくいかない場合、〈事務作業の増加で保健指導の時間が削られる〉という影響が懸念される。そのため、保健師側から事務職に歩み寄っていくことで、連携が円滑になり、保健師の専門性を活かした効果的な保健事業の展開にもつながると考える。

しかし、これらの難しさを乗り越え【互いの役割を活かした連携】を図ることで〈住民目線の貴重な意見をもらい一緒に考える〉こと、〈保健師だけでは稼働がとれない部分を連携〉し〈事務職との連携による抜け目のない支援〉を行っていた。保健師は〈事務職が得意とする仕事を理解〉し、協力して健診の受診勧奨に向け、数千人もの台帳作成を実現した。そして、〈連携の体験からその大切さをつかむ〉ことにつながった。

杉田らは保健事業展開において担当部署の連携を意識した体制構築が必要と述べている<sup>3)</sup>。本研究の結果から、体験を通して学びながら連携の技術をつかみ、体制整備につなげていくことの重要性が示された。

### 2. 保健師と事務職の連携の工夫とあり方

平野らは、実践に対する事務系職員の理解を得る努力が必要<sup>4)</sup>と述べている。本研究においても【保健師の連携を重視する姿勢】として〈仕事は一人ではできない〉ため、〈組織を超えて事務職と連携するスタンス〉をとっていることがわかった。また、【事務職との連携を促進する打ち合わせ】として、〈人が変わっても繰り返し説明し方向性を共有〉するため〈打ち合わせの参集範囲の判断〉を行い、〈顔の見える綿密な打ち合わせ〉で理解を得る努力をしていた。さらに、保健師は、事務職と同行訪問を行うなど〈現場に出向き住民の生の声から現状共有〉し、〈切り札となる法的根拠を示し主担当で動いてもらう〉よう働きかけていた。

保健事業の効果は事務系職員に理解できるように提示することが重要<sup>2)</sup>とされる。〈保健活動の結果はすぐ表れないが数値で求められることへの対応〉をしてい

く必要があり、〈保健師の関わりが全てではないが成果との関係を見せる〉ことで効果を伝えていた。また、事務職が理解しやすいよう〈簡潔で目を引きわかりやすい伝え方〉を用い、〈スケジュール管理を行い見通しを伝える〉工夫も行われていた。

連携の基盤づくりとして、管理期保健師は〈目標に向かって役割分担しPDCAサイクルを意識〉して〈リーダーとして目標や仕事の姿勢を示し共有〉し、〈日常の対話を重視した職場の雰囲気づくり〉を行っていた。

これらのことから、事務職との連携のあり方として、丁寧な説明や打ち合わせにより理解を得ること、連携が促進するよう日頃からコミュニケーションを図ることの重要性が示唆された。

今回、事務職との連携の工夫を明らかにしたことで、連携により保健事業を効果的かつ効率的に行うことができる可能性も示された。

## 結 論

- 1) 事務職の熱意や考え方・得意な部分の個人差など連携における難しさはあるが、保健師は連携を重視する姿勢を持ち、連携の体制づくりを行っていた。
- 2) 事務職との連携の工夫として、理解を得るためのわかりやすい伝え方、連携を促進する打ち合わせを綿密に行っていた。
- 3) 事務職と保健師の互いの役割を活かした連携を図ることで保健事業の効果的かつ効率的な展開につながる可能性が示唆された。

## 謝 辞

本研究の実施にあたり、お忙しい中快くご協力いただいた市町村に勤務する管理期保健師の皆様へ心より感謝申し上げます。

## 引用文献

- 1) 尾田進(2013):「地域における保健師の保健活動に関する指針」のポイント. 保健師ジャーナル, 69(7):496-503.
- 2) 大森純子, 宮崎紀枝, 麻原きよみ, 他(2007):保健事業の展開において保健師と事務系職員の意見が異なる状況に関する質的分析. 日本地域看護学会誌, 9(2):81-86.
- 3) 杉田由加里, 水野智子, 横山徹爾(2016):自治体における生活習慣病予防の保健事業に関するデータ分析・活用の体制づくり, 千葉大学大学院看護研究科紀要, 38:39-46.
- 4) 平野美千代, 佐伯和子(2008):行政機関で行う保健指導に対する保健師と事務系職員の認識の比較, 日本地域看護学会誌, 10(2):101-107.